

## あたたかな雪～ササの生き残り作戦

北海道には、本州にあるような太くて背の高いタケの仲間が生まれません。ですが、北海道の野菜売り場にも「タケノコ」はならんでいます。よく探すと、太いものと細いものがあります。北海道に自然に生えるのは細いほうの「タケノコ」で、実はタケではなくササの若芽です。道内では一般的に「タケノコ」「根曲がり竹(ネマガリダケ)」と呼ばれていますが、チシマザサという学術的な名前があります。

北海道には大きく分けてミヤコザサ、クマイザサ、チシマザサの3種類のササがあります(図1)。これらはそれぞれ生える地域が違い、それは雪に関係があ

るとされています。植物の話なのに、なぜ雪のことが出てくるのか不思議に思うかもしれません。

ヒントは雪の中の温度にあります。雪の中は、外に比べて暖かいのです。なんだかあべこべのようですが、かまくらやイグルーの中に入ったことのある人は、雪の中が暖かいことを実感したことがあるでしょう。納得できない人は下のグラフ(図2)を見てください。中と外では、中の方が約5度も温度が高いのです！

さてここで、道内のササ3種類の生育地の分布(図3)と雪の深さ(図4)を見比べてみてください。

(次ページにつづく)

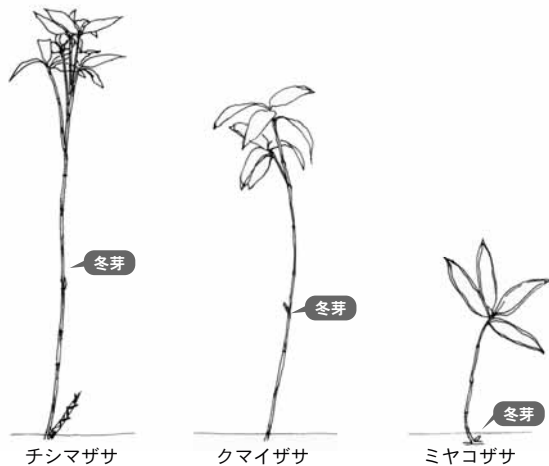


図1：北海道に生えるササの仲間

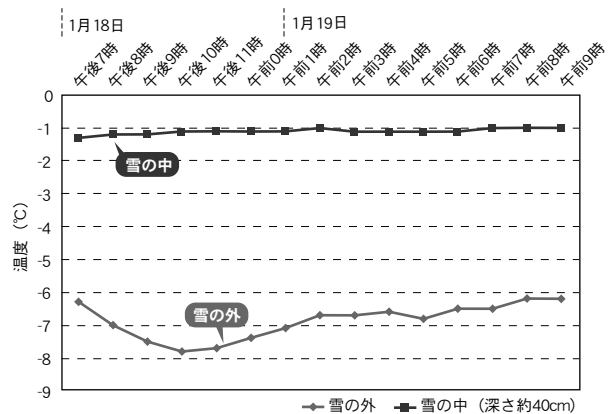


図2：雪の中と外の気温のちがひ(札幌市中央区北1条西9丁目)  
※外の温度の上昇はセンサーに雪が積もったために起きた。

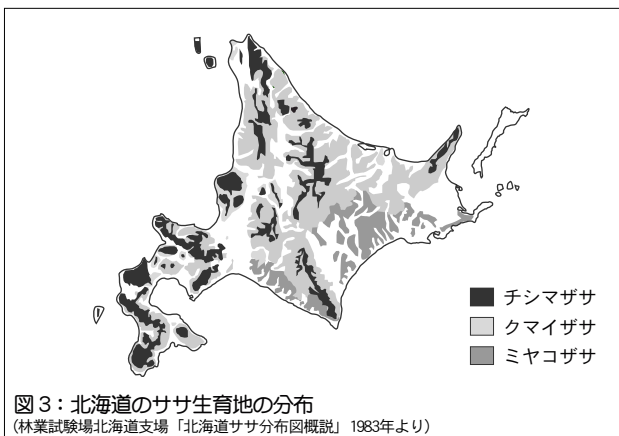


図3：北海道のササ生育地の分布  
(林業試験場北海道支場「北海道ササ分布図概説」1983年より)

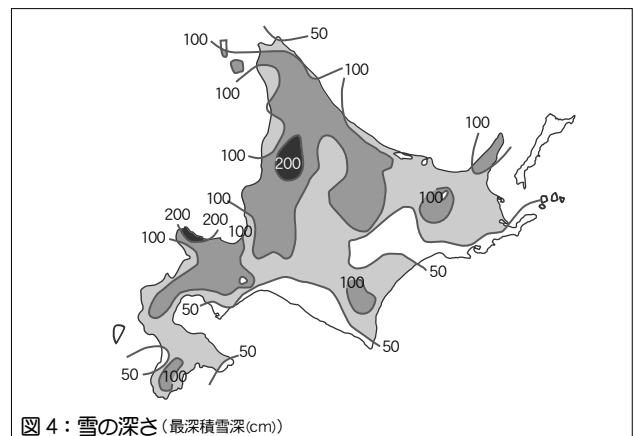


図4：雪の深さ(最深積雪深cm)

ミヤコザサは雪が少ない地域、チシマザサは雪の多い山地、それに続いてクマイザサが山のふもとから平地にかけて生えているのがわかります。さらに、来春に芽吹く芽の位置を見ると、ミヤコザサは地面の下、クマイザサとチシマザサは茎の途中につけます。つまり、クマイザサとチシマザサは深い雪の下にうまることで芽を寒さから守ることができるのです。逆にミヤコザサは地中に芽をつけるので、雪が少ない地域で生き残ることができたといえます。

このように北海道のササは雪の降る気候にうまく合った越冬方法を持ち、山奥から平地までどこに

でもある植物です。しかも大量にあり、放っておいても育ちます。改めて調べると、ちまきやタケノコ(ササの子)といった昔からの食べ物はもちろん、ササ紙、クマザサ茶、ササ抽出エキスの抗菌作用(着色料、香料としても利用)、最近ではバイオマス燃料の原料としてササを活用する研究もされているそうです。

もしかすると、どこにでもある植物が人間の生活に欠かせないものになる“ササの時代”がくるかもしれません。

(山崎)

## サッポロカイギュウ、あちこちへ出張!



冬休みの間、サッポロカイギュウが大きな体で小回りきかせて、あちこちへ「出張」しました。模型組み立てを体験できる台座も完成!カイギュウの体の大きさ、骨格のしくみを実感できます。

1月  
13・14日

チルドレンズ・ミュージアム



▲これまでは鉄骨で支えるだけだったのを・・・



①みんなで組み立てられるよう、木の台を作製しました。



②ばらした模型をパズルのように台にのせて、組み合わせていくと、



③完成!

1月16日  
〜  
22日

札幌市博物館活動センター・大丸札幌店 冬休み共同企画「札幌はむかし海だった!」展



▲突然現れた巨大な動物に「何、これ?」。恐竜じゃないよ、カイギュウだよ。



▲店内で化石を探す「化石探検隊」は定員3倍以上の参加がありました。